

はじめに

岩手県大槌町吉里吉里中学校の佐野智則君(一五歳)は、震災を経験し、片付けやがれき処理のボランティアを経験して、今は、「消防団員か警察官になって大槌の町を守りたい」と言っている(『日本海新聞』十二・三・十一)。十一年の東日本大震災は、あまりにも大きな犠牲をもたらしたが、それだけに人々に「これからの日本のあり方や日本人の生き方」について根本から考えさせる機会となった。

「多くの犠牲の上に立つ繁栄」を反省して、再生可能エネルギーの開発も本格的になってきた。私は、新しい生き方を真剣に考え始めた日本人に「日本の希望」を見いだす。

国語科は、人間の生き方や社会の仕組みについて深く鋭く考える「言葉」を身につけさせる教科であり、そのための「言葉のまなび方」を教える教科である。

一 自己の在り方を問い直させる単元学習

「単元学習」は、私たちの生きている「状況において」、絶えず自己の在り方を問い直させる学習指導法である。

大村はま先生在職中最後の年(一九七九〈昭和54年〉)の、単元「知ろう世界の子どもたちを」の実践を通じての提案に、「ときのニュース、世の動きに関心をもち、時事性をもった、なまなましい現代に触れている国語教室にするくふう」があった。

大村はまは、「戦争を防ぐための取り組みはいろいろであろうが、その中で、確実にできること、それは世界の子どもたちが知り合うことである」と考え、実践を生み出していった。退職後も研究発表会において、以下のような実践的提案を続けたのであった。後に、この実践は、「理解する、ということは、平和にひびき、直ちに世界平和につながるような実感はないかもしれませんが、もとのもとのもとにはなると思うのです。」と考え

を深め、そこに目標をおいた学習は豊かな言語活動を含んでいる、と国語科単元学習としての意義を見いだしている。(『大村はま 講演集 下 教えながら教えられながら』二〇〇四年 風濤社二五〇頁)

ア 「外国の人は日本(日本人)をこのように見ている」(74年)

イ 「知ろう世界の子どもたちを」(79年)

ウ 「知らせよう日本の子どもたちを」(80年)

エ 「個人文集第二集〈わたしのペンフレンド……紹介〉」(82年)

オ 「隣国に友を求めて」(85年)

カ 「日本の少女少女に贈るインドネシア少年少女読本I」(86年)

キ 「私たちのフォスター・きょうだい」(87年)

ク 「大村日本語教室資料部助手2年C組の……」(88年)

ケ 「東アジア・東南アジア少年少女会議」(90年)

コ 「日本と日本人をとらえ直す」(91年)

サ 「アイヌ、その意味は『人間』」(93年)

シ 「ことばと人間のめぐりあわせと面白さ」(99年)

単元「アイヌ、その意味は『人間』」(3年)が生まれた直接の動機は、アイヌ語の「シャモ」という語は「シサム(わが隣人)」という意味であることを知ったことであると大村はまは語っている。アイヌ民族の土地を奪って耕してきた日本人を、そのように呼んでいたことへの感動からこの単元が生まれた。この単元の目標の九番目に、価値観に触れる目標が据えられていた。

九、知らなかった世界に触れ、語いを広げる。今までの生活のなかで、考えたり話したりしたことのない考え方、感じ方に出会い、受けとったものを表すことばを求め、探し、苦しみ、語いについて考える姿勢、態度をみがくこと。

意外な自然観、人生観、価値観に接し、ことばを探し求める経験を重ね、自分の語いの世界を広げること。

(大村はま『日本の教師に伝えたいこと』一九九五年筑摩書房 一四〇頁)

大村にとって、「ことばを増やしていくこと」・「一つのことばを覚えることは、一つの人生を知ること」(一四九頁)であった。

例えば、「カムイということばをしる」ということは、「違う精神世界」と出会い、「精神を表すことばを勉強すること」であった。

神様でもなく、もちろん日本の天照大神とはぜんぜん違う。イスラム教ともキリスト教とも違う。目につくもの、アイヌでないものは、みなカムイだなどと言われますと、どういうことか分からない。ですから、植物人間などということばを使っている和人の私たちには、植物というものをカムイと言っているアイヌの気持ちを理解するのは、なかなか難しいのです。植物はみなカムイであって、人間ではない。アイヌ、つまり人間ではないのです。人間でも神でもない、その間にカムイというものを持っているのです。(同前書 一五一頁)

大村にとって、「ことばを増やしていくこと」・「一つのことばを覚えることは、一つの人生を知ること」(同前書 一四九頁)であった。新しく言葉を知することは、自然観、人生観、価値観を豊かにする事であった。つまり、豊かな人間になることであつた。大村は、そのような「ことばを学ばせること」と「その学び方を身につけさせること」に国語科単元学習の意義があると説いてきた。

二 思考力育成の領域 ― 思い・知り・考える ― 言語活動の領域について

私は、これからの国語科の構造として、次のような六領域を構想している。

①見ること/②聞く・話すこと/③読むこと/④書くこと/⑤言葉について考える/⑥思考力

①番目に「見ること(ビジュアルリテラシー)」を位置づけたい。挿し絵を見てお話の内容を想像する、まんがを読む、写真を読むという活動などの

領域である。マスコミに対する批判的思考力を育てるのも内容とする。

⑤番目に「言葉について考える」という領域を位置づける。「学習指導要領」では、一九九八(平成 10)年版まで「言語事項」となっていて、二〇〇八(平成 20)年では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と改名された。文字・語彙・文法・古典の言葉などが含められておりいかにも据わりの悪い領域名である。これらを「メタ語学習」領域とするのである。

電子機器を、「集合知」の形成媒体とするソーシャルネットワーク・メディアとして位置づけ、「集合知」形成力を育てるのもこの領域の指導内容とする。

これまでのマスコミは、上から下への情報発信装置であつた。放送局で取捨選択し編集された情報や映像が流されていた。新しいツイッターやフェイスブックによるソーシャルネットワークサービス(SNS)では、隣にいる人々との(つまり横並びの)加工されていない情報が同時現象として伝えられていく。これまでの発信者→受信者という関係が崩れて平等な相互発信者になるのである。そのことを通して「集合知」を形成していくことができる。

「アラブの春」のような大衆行動を組織する力も持っている。原発事故後においてマスコミ情報は無力であつた。戦時中の「大本営発表」として受け取られ、人々は SNS に正確な情報を求めた。SNS は、即物性、同時性、情報の加工・非加工においてマスコミとは異なる特徴を持っている。(それはデマも流され得るという性向も持っているのである。)私たちは、それぞれが情報を選択・発信・補完して生きる新しい情報回路に生きる時代に入ったのである。このような新しいネットワークと言語生活の在り方について考える領域にしたい。

⑥番目に「思考力」を国語科教育の領域として位置づけ、その取り立て指導がおこなわれるようにしたい。

三 思考力と思考の型

1 思考力とは

『日本語大辞典』(梅棹忠夫他編、講談社 一九八九年)は、「思考力(thinking)」を、「ある結論を得

るまでの観念の過程」と定義している。これに従うと、思考には、イメージによって解決する過程と論理によって解決する過程がある、とすることが出来る。像的思考の要素は、比喩・描写・人物像・視点人物・事件などであり、論理的思考の要素は、比べる・分ける・推論・まとめる・構造・総合などである。

2 思考の型

これまで、私は、「アブダクション」・「像的思考」・「理的思考」の三つの型に分けて、未熟ながらその構造の大枠を提案してきた。これからは、これらの諸要素の下部構造を解明し、思考力育成カリキュラムの準拠枠(フレームワーク)を作りたいと考えている。今、その一部を掲げて建設的批判をあおぐことにする。

	小1 2	小3 4	小5 6	中学・高校
アブダクション 感じる・思う	観 イメージ	ひらめき 観点		仮説
像的思考 たとえる (比喩)	喩 徴	メタファー	擬人法	寓喩象
論理的思考 くらべる (比較)	対比	類比	類推	推論 (帰納・演繹)
分ける		分類	分析	批判
まとめる		下位語(具体)	上位語(抽象)	総合 批評

諸要素を、「たとえる→直喩、メタファー、擬人法」とさらに分けていきたい。そうすることによって、学習内容の系統化を図ることができよう。

四 学ぶ力を育て、集合知を育てる

1 調べる力を育てる ―小学校一年「歯がぬけたらどうするの」(T社)を学習材として―
この説明文は、「せかいの子どもたちは、ぬけた歯をどのようにしているのでしょうか」という問いかけの文で始まり、七カ国の風習が紹介されている。

- ◆ どんなやりかたがあるかをたしかめながら読みましょう。

◆自分ならどうするかを書きましょう。(七時間)
読解と表現との関連指導をする「手引き」がつけられており、言語活動を通して子どもが学習の主体となるように配慮されている。

私はこの学習活動に加えて、調べ方を育てる読書指導へと開いていく単元的展開を試みたい。この教材の出典となった「はがぬけたらどうするの」(フレーベル館 一九九九)の複本を学習材とし、「どんなことがわかりましたか?」問いかけて、分かったことを発表させる。投げるところ・唱えごと・もらう物、などの観点から各国の風習を分類して発表する子どもも出てこよう。(三時間)
一冊の本を読み通し、要点を読みとり、必要な情報を取り出す力を育てることを目標とする。

2 中学校一学年の単元「震災を見つめる」

中学校一年の国語科総合単元「あれから一年強く生きる」(一四時間)―遠藤瑛子(当時、神戸大学附属中学校)教諭による、一九九六(平成8)年一月の実践である。一九九五年一月に阪神淡路大震災がおきてからまる一年経っているとは言え、まだプレハブ校舎で授業がおこなわれていた。表面的には明るく振る舞っている生徒にも「やる気を失ったり、少しの揺れで『すわ、地震』と腰を浮かしたり」する落ち着かない姿が見られた。

〈単元の意義〉震災を忘れ、震災から逃げようとしている自分と対峙し、言葉を通して体験を記していくことで、震災を克服し強く生きることを考えさせる。

〈単元のねらい〉学んだ作品の表現の多様性(比喩、具体的な描写体験を通しての言葉)を活用して、書いた作文を読み返し、表記や表現について推敲する。(その四項目の一つ)

〈単元の構成〉

一次 〇七・一・一七を思い出し、第一次作文を書く。教師自作の被災体験作文を導入教材とする。(二時間)

二次 「VTR「鷹取東地区の一年」を見て、生きぬく、心に刻む」の意味が説明できる。(三時間)

三次 マンガ「愛ちゃんのボランティア神戸日記」(たけしまさよ作)を読み、感想を交換し合い、作者を招いて質問する。(五時間)

四次 第一次作文を推敲する。下書きをどのよう

に直すと、記録らしくなるか説明する。(四時間)
家が全壊して、一時ではあるが転校せざるを得なかった生徒の作文を素材にして、推敲の仕方を交流する。(四時間)

遠藤瑛子教諭は、「単元を終え何かすっきりした気分になったと書いた生徒も多かった。大きなショックを、言葉で癒す。ことができたのではないだろうか。」と書いている。(遠藤瑛子「総合単元『あれから一年 強く生きる(第一学年)の実践』『両輪』 第20号 神戸大学発達科学部・両輪の会 一九九六年十月)

3 高校一学年の単元「東日本大震災」

「現代に触れている国語教室」にするために、高校一学年の一二月から三月までの帯単元として、「単元東日本大震災を見つめる」を高校教師の立場で構想してみたい。

〈目標〉 この単元では、約三週間かけて主題「東日本大震災」を見つめさせ、考え続ける習慣を育てる。出来事や人々の多様な意見を記録して、自分(または自分達)の意見をつくる練習をさせ、その能力を育てる。

〈指導方法〉 日々の事象に関心を持続させ、意見形成が必要な場に立たせる。日常の出来事やそれに対する人々の意見をブログに書き込ませる。ブログを使って情報と意見の交流(分かち合い)をおこない、新しい意見を持つに至る経験をさせる。

〈学習の流れ〉

一次

① 導入(教師による単元趣旨の提案と学習展開の説明) やがて、二〇一三年の三月には、「東日本大震災」の二年目が終わる。二〇一二年末から三月に現れた「東日本大震災」関連の出来事について一日に少しの時間を割いて、出来事・被災者の発言・ボランティアの活動・復興に関する言説など、さまざまな情報の中から印象に残った事をメモし、題名と感想を添えて、授業以外の時間にブログに書き込もう、と教師が呼びかける。(一時間)

二次

① ブログに「〇〇高等学校一学年〇〇教室」のコーナーを設ける。
② 東日本大震災に関する最近のいろいろな出来事についてのブログ上の話し合い。(〇時間)
③ 生徒は全員が三つ以上の話題と感想を二〇〇字程度で書き込む。ペンネームでなければ書けな

いような内容は今回は取り上げない。(二週間)

三次

教師が数項目のトピックを提示し、トピックごとに編集グループをつくる。それぞれの編集グループはブログを分類して原文通りに転写し、配列する。書かれた内容についてグループとしての意見をまとめる。(一時間)

四次

それらを一冊に合冊する。冊子を読み、①引用の仕方、②感想・意見の書き方、③感想・意見、について各自の意見を交流する。(一時間)

各自の提出したブログを手がかりに東北大震災後の日本の在り方や日本人の生き方を考え、問題の見つけ方、集団的なコミュニケーション能力の育成、集合知の形成方法などについて学ばせたい。

おわりに

私たちは、価値観の転換期にあたって、毎日、さまざまな出来事、さまざまな探究的な言説、さまざまな生き方に出会っている。この時にあたって「なまなましい現代に触れている国語教室にする」単元創造を試み、「自然観、人生観、価値観」を思い・知り・考える力を育てていきたい。併せて、「言葉を学ばせ」・言葉のまなび方を身につけさせていきたい。新しい世界を切り開いていく若い世代の行動力の「もとのもとのもとに」なることばの力の培いに努めていきたい。

編集部注 初出

2012年『月刊国語教育研究』(日本国語教育学会) 480号